

友情



Ｔさんと初めて会ったのは、もう二十年も前になるのか。

その頃夫はある業界誌の座談会に出席したのだが、その後の慰労会で、二人の対談相手もお酒好きで大いに意気投合し、今後毎月飲み且つ語ろうということになったという。

「お前も来ないか」

夫が珍しく私に声をかけた。会社の仲間と違った知的な集まりに、働き詰めの私も参加させてやろうという思いやりだったろう。それに多分大蔵大臣の私が側に居た方が何かと都合がいいと思っただに違いない。

当時わが家では、子供達が大学生一人、高校生一人、小学生二人という、人生で最も学費の重い時期であった。その上にマンションのローンも抱えていた。しかし幸せなことに私はその十年ほど前から大

手の電機会社の電算室の仕事をしていて、周囲から見れば破格の報酬を手に入っていた。

職場と家の往復、休日は山のような洗濯や大人数の食料の買い出しなどに明け暮れて、殆ど都心に出ることはなかった私であった。待合わせの場所は銀座の飲み屋とのこと。夫に電車の乗り換えや目印の建物などをこまごまと聞いた。当日は定時のベルが鳴るやいなやさつと会社を飛び出して、一目散に駅に駆けつけた。

一時間ほど乗って、地下鉄の銀座駅の出口を上がると、大通りはネオンと車のライトの洪水である。裏通りの飲み屋街を何回も右往左往した後、ようやく目当ての小さな店にたどり着いたのだった。

夫に紹介された初対面の彼らは、早大教授のＴＨ氏とＮ企画社長Ｎ氏、そして幹事役を勤めていた業界誌編集長のＴさんだった。Ｔさんは飲めないが、他の三人はもうすでに一杯入って饒舌になっていた。それからの交友は、とても語り尽くせるものではない。キザな人たちの集まりということで、キザ会

と名付けられたその会は、十余年の間、毎月殆ど欠かすことなく続いた。

一年ほどしてその銀座の飲み屋が閉められてからは、各会員のお勧めの店を渡った。その頃になるとグルメの会の様相にもなつて、その道で有名な店を選んだ。鰻、鮮魚、鍋、豆腐、中華、あけくに鯨の店にも行つた。その上、年に二回は近郊の宿に泊して語り明かした。

会員も、M慶大教授夫妻、日本を代表するコンピュータメーカー社のNY氏、中堅の損保会社のマーケティング担当で才気溢れるK氏などが加わつて、話題は時事、経済、芸術と広範囲なものだった。若く気鋭な課長だったNY氏、K氏ともいまやそれぞれ会社の重責を担っている。

一方、最盛期にはキザ会のスポンサー的存在でもあつた天才的で破滅型の広告会社社長のN氏は、十年ほど前から脳梗塞でリハビリを受けていた。私たちが鹿児島に戻る頃は、我が儘を言つては病院を転々としていて、その都度見舞つていたのだったが、

二三年前に鬼籍に入つたとのことである。また私より五才若くアメリカの大学で美術を教えていたこともある才女のM教授夫人も癌で昨年の夏お亡くなりになった。

私はいつの日か、その語り尽くせぬ思い出も書き綴らねばならないと思つている。

鹿児島に戻つて間もなくTさんから「お饞別」と言つてバルザック全集二十巻が送られて来た。夫が希望したらしいが、それを見たときは目頭がじんと熱くなつた。神田で見つけて来たのだろうが、まだ大学生の娘さんもいた筈で、無理させてしまったのではと胸が詰まつた。

その後も夫は上京する度にTさんと会つている。キザ会も新しいメンバーが加わつて今も続いていて昨年は私たちの上京に合わせて、神楽坂の鰻屋で開いてくださった。

2000年の正月が明けて間もなくTさんから電話が掛かつて来た。「佐々木邦全集」が手に入った

という。

かつて私は佐々木邦が好きだった。今の世にはあの品のよいユーモアが欠けていると思っていた。

「私は彼のようなほのぼのとした心温まる作品が書きたい」と、会う人毎に語って来た。三四年前に「さんに彼の全集を見つけてほしいと頼んだことがあって、その時も「ユーモア小説全集」の中の一冊を見つけて贈ってくれた。その後も忘れずに心掛けてくれていたのだ。

かつて私が神田の街で尋ねて回った時は見つからなかった。今頃はきつと高価な値が付いているに違いない。このところ物入り続きの私は、金額が気掛かりで一寸口ごもった。そんな気配を感じ取ったのが彼は陽気な声で、「『お年賀』で贈呈しますよ」と言う。そして現実にはそれは一昨日届いたのである。十巻に補巻の十一冊であった。

夫にいくらだったのか聞いてもらった。

「一本だというから一万円かと聞いたたら十万円なのだそっだ」

という。本当に何ということだろう。こんな高価な物を貰っていいのだろうか。

自分の部屋の棚の上段にきちんと並べ、先ず一巻を抜き出した。芥子色の布で装丁されたそれは、昭和四十九年に刊行ということで、長らく店晒しだったのか、箱は帯の跡がくつきりと焼けているが中身は新品である。巻末の尾崎秀樹の解説から彷彿と浮かび上がってくる邦の人物が、四五十年前から私の抱いていた人物像と一致して嬉しい。

この友情に報いることは、私が納得の行く作品を書くことしかないと思う。そして私はそのために真剣に精進しようと思密かに固く決心したところである。

